

特別史跡

# 一乘谷朝倉氏遺跡36

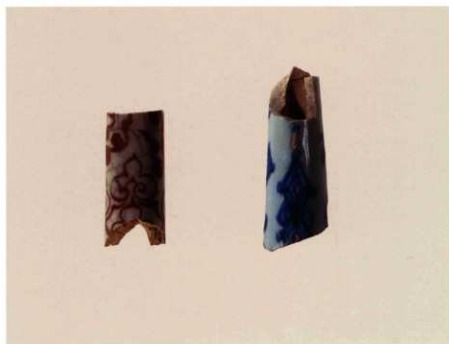
平成17年度発掘調査・環境整備事業概報



福井県立一乘谷朝倉氏遺跡資料館



第118次発掘調査区(八地谷地区全景)



第118次発掘調査出土 釉裏紅・染付水注破片

特別史跡

# 一乗谷朝倉氏遺跡36

平成17年度発掘調査・環境整備事業概報

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

## 序 文

ここに平成17年度に当資料館が実施いたしました発掘調査事業と環境整備事業、ならびに福井豪雨被災による災害復旧事業の概要、『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 36』を刊行いたしました。

発掘調査は「八地千軒」と地元でいい伝えられている八地谷（奥行400m、谷口幅160m）の谷口部に位置する「雲正寺」でした。遺構は削平が著しく特記すべきことは少ないものでしたが、遺物としては当遺跡出土2例目となる釉裏紅水注片1点や、調査区西端高台の造成土から大量の石塔類597点が出土し特筆されます。その銘文から時衆や禅宗の寺院のものと考えられるものもありました。また、古いものでは文安3年（1446）の銘がある五輪塔が出土し、全体としては1490年～1500年代に造立のピークがみられました。

環境整備は字「新御殿」と字「川合殿」でした。福井豪雨被災による災害復旧は、崩落した朝倉館山裾法面の修復と同館北濠・西山光照寺池の流土除去を実施しました。これらの整備地は一乗谷朝倉氏遺跡の見所で、今後、観光客や見学者に大いに喜ばれるものと思います。

最後になりましたが、本年も計画どおり諸事業が順調に進捗し、この概報が刊行できましたこと、ひとえに各関係機関および関係者各位のあたたかいご指導・ご協力のたまものと心からお礼を申し上げまして序といたします。

平成18年3月31日

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長 青木 豊 昭

# 例言

1. 本書は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成17年度に実施した国庫補助事業による発掘調査、および環境整備事業の概要報告書である。
2. 本年度は、「発掘調査・環境整備事業第3次中期10ヶ年計画(新中期10ヶ年計画)」の初年次にあたる。本書は、第118次発掘調査の成果、および第109・100次調査地環境整備、朝倉館山掘法面他災害復旧整備工事の概要について収録した。
3. 本書の作成にあたっては、調査担当者が各項目を執筆し、項目末に文責を記した。また、全体の編集は宮永一美が担当した。

# 目次

## 巻首図版

### 序文

### 例言

### 目次

1. 平成17年度の事業概要 ..... 3
2. 第118次発掘調査 ..... 7
  - 遺情 ..... 7
  - 遺物 ..... 13
3. 環境整備 ..... 27

第1図 平成17年度発掘調査・環境整備位置図

第2図 第118次発掘調査位置図

第3図 第118次発掘調査遺構全測図

第4～6図 第118次発掘調査遺構詳細図

第7～13図 第118次調査出土遺物(1)～(7)

第14図 第109次調査区新御殿整備全体図

第15図 第100次調査区川合殿整備全体図

第16図 朝倉館北濠復旧整備図

第17図 朝倉館山掘法面等復旧整備図

表1 平成17年度事業概要一覧

表2 第118次発掘調査出土遺物一覧

表3 第118次調査出土石造物銘文一覧

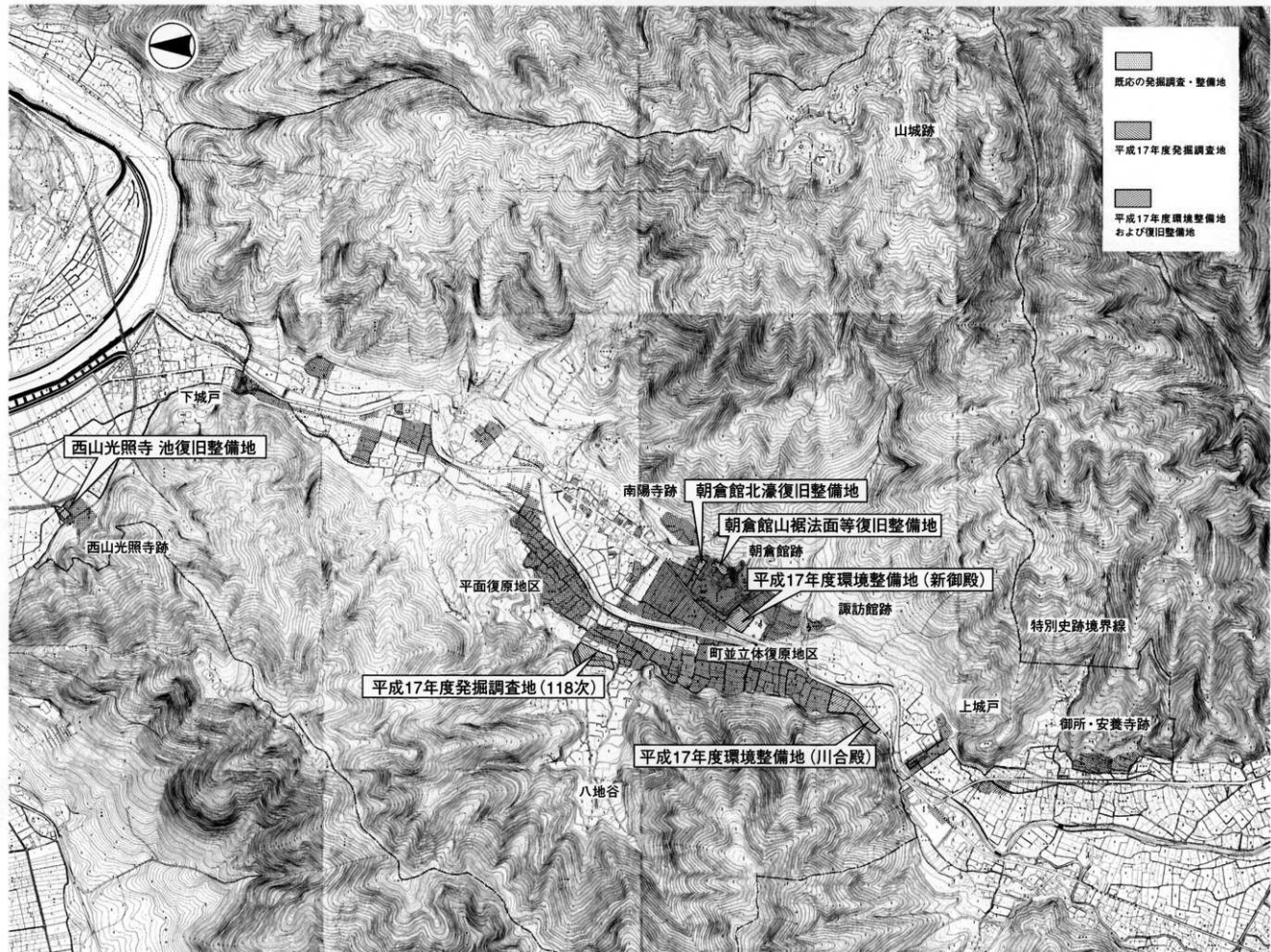
表4 第118次調査出土の石造物年代別個数

挿図1 袖裏紅水注実測図

挿図2 SK5874出土遺物実測図

挿図3 SK5874出土遺物写真

- 図版 第118次調査区遺構 ..... PL. 1～7  
第118次調査出土遺物 ..... PL. 8～14  
第109・100次調査区整備工・朝倉館山掘等復旧整備工ほか ..... PL. 15～17



第1図 平成17年度発掘調査・環境整備位置図



## 1. 平成17年度の事業概要

平成17年度は国庫補助事業により第118次発掘調査を実施した。調査区は平成13年から継続して発掘されている八地谷地区に位置する。八地谷は一乗谷川の支流八地谷川の両岸に形成された奥行き400mほどの谷で、河地区の発掘調査により武家屋敷や中小規模屋敷、道路などの遺構を検出し、大型武家屋敷の集まる平井地区と寺院や町屋などが集まる赤淵・奥間野地区がつながり、谷全体に広がる城下町の計画的な町割が明らかとなった。本調査区は第113次調査区の西側、平成15年度に調査された第114次調査区の北側に位置し、当初、平成16年度の計画調査として発掘が開始されたが、同年7月18日の福井豪雨により遺跡各所が大きな被害を受け中断せざるを得なかった。そのため16年度は被害を受けた遺跡の復旧を行い、17年度に中断した調査を再開し、3,000㎡を発掘した。

この調査区は、「雲正寺」という字名から、寺院に関する遺構が検出されるかと思われたが、北側の区画一部を除いて遺構面の削平が著しく、戦国時代の屋敷割りや建物配置は明確に確認できなかった。しかし、遺構残存の良好だった北側区画からは、礎石建物や掘立柱建物の他、蔵と考えられる石敷建物跡、石積施設なども検出した。また、出土遺物としては、当遺跡出土2例目となる釉裏紅の破片が1点出土し、調査区西端高台の造成土からは大量の石塔が出土した。

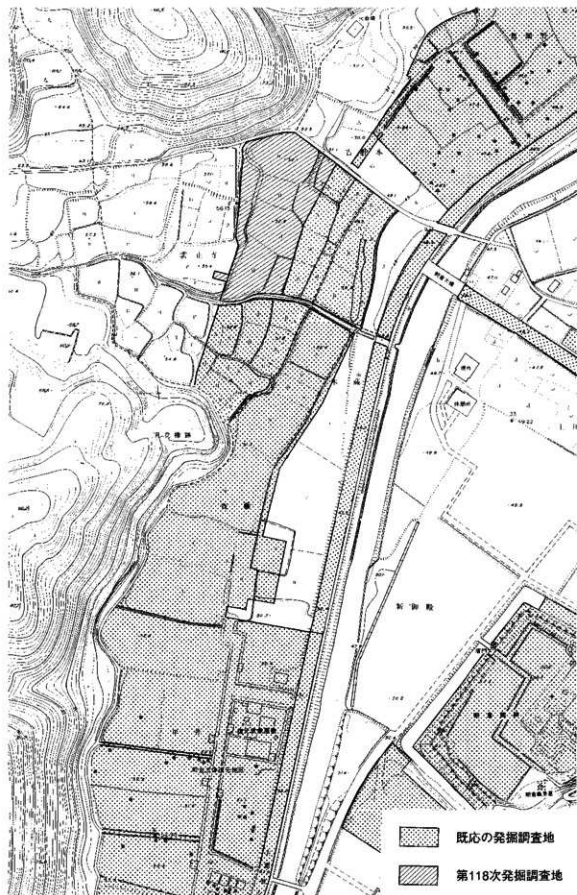
環境整備事業としては、通常の整備事業の他に、平成16年の豪雨で被害を受けた既存整備地の災害復旧も実施した。まず通常の環境整備事業として、平成12年度に発掘調査した第109次調査区(新御殿地係)2,000㎡、また平成9年度に調査した第100次調査区(川合殿地係)1,800㎡について整備工事を実施した

次に、災害復旧の環境整備として、崩落した朝倉館山裾法面等の復旧整備工事を実施した。また土砂の流入により埋まった朝倉館北漆、および西山光照寺池について土砂除去等の整備工事を行なった。また権殿地区については、復旧工事の実施設計を委託した。

(宮永一美)

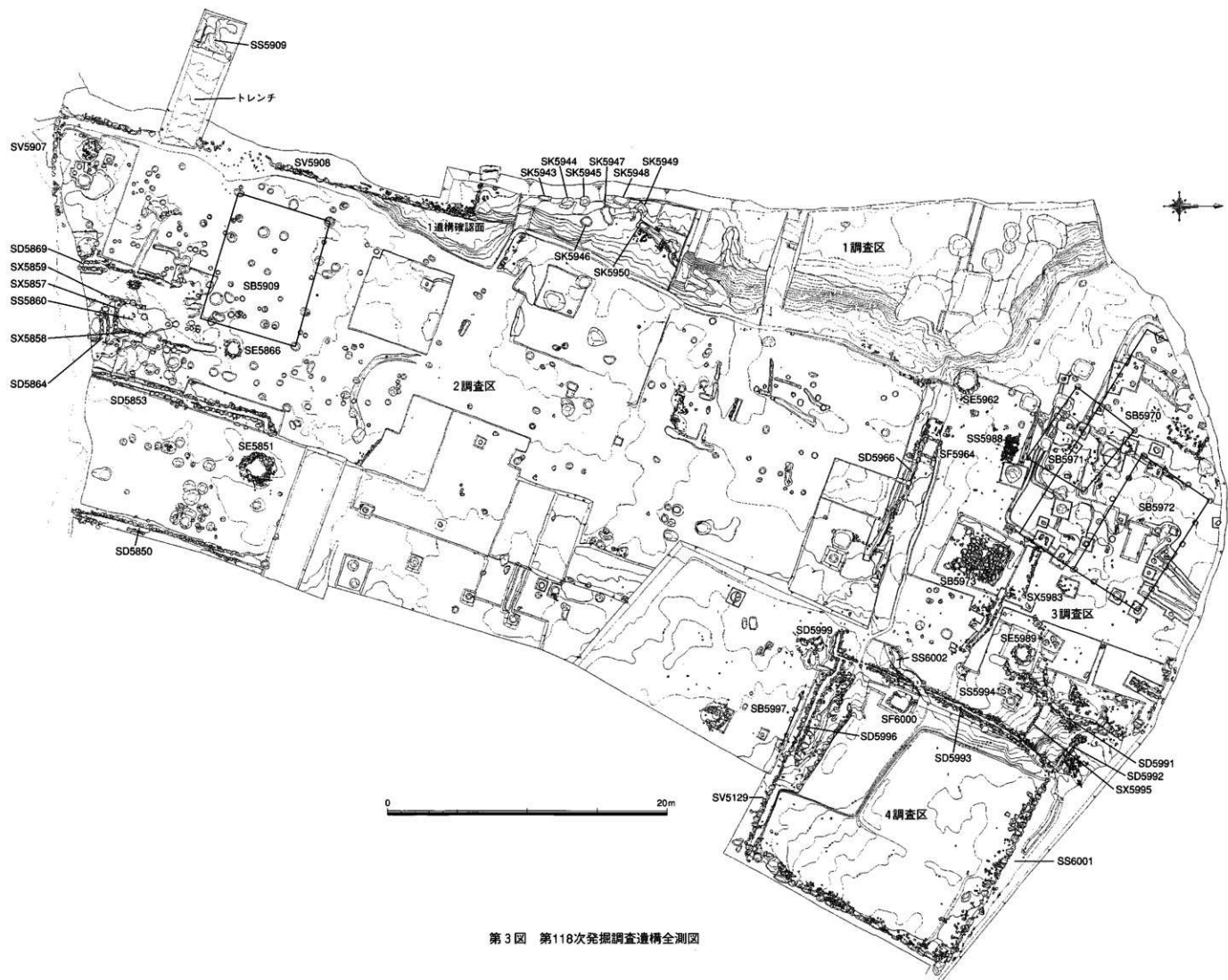
調査次数	調査箇所	調査期間	面積	調査事由
第118次	福井市城戸ノ内町 雲正寺	平成17年4月1日～ 平成18年3月31日	3,000㎡	第3次中期10カ年計画に基づく 調査
	環境整備箇所	整備期間	面積	調査事由
第109次発掘調査地(新御殿)		平成17年7月12日～ 平成18年3月20日	2,000㎡	第3次中期10カ年計画に基づく 整備
第100次発掘調査地(川合殿)			1,800㎡	道路舗装・井戸補修・ 石垣補修・植栽・土塁復原
朝倉館山裾法面		平成17年5月30日～ 平成18年3月30日	幅30m、高さ (法面)	平成16年の豪雨被災に対する復 旧整備
朝倉館北漆			375㎡	崩落土砂除去・補強盛土工・ 植栽・流入土砂除去
西山光照寺池			300㎡	

表1 平成17年度事業概要一覧



第2図 第118次発掘調査位置図 (S=1/2000)





第3図 第118次発掘調査遺構全測図

## 2. 第118次発掘調査

平成13年度の第112次発掘調査より継続してきた八地谷地区における発掘調査も、今回報告する第118次発掘調査をもって終了する。

今回の調査区は、後世における谷部の高低差を利用した水田の造成により、遺構面の削平が著しく、各区画同士の遺構面の繋がりが不明な部分が多いことから、本稿では調査区ごとに報告をおこなうこととする。

### 遺構（第3～6図、PL.1～7）

#### 【1調査区】

本区画は調査区の西端において確認された区画であり、高低差1.3～1.9m前後を測る高台である。平坦な上面を有し、その半場には複数の土壌を検出することができた。特に南側で検出されたSK5943・5944・5945・5946・5947・5948・5949・5950は、土壌内埋土が炭化物で形成されており、炭化物内には人骨と想定される火葬骨が多く含まれていたことから火葬場と考えられる。火葬場周辺からは石塔が倒壊、散乱した状態で出土している。

また、高台北側斜面部からは多数の石塔が高台より崩落した状態で検出されている。これらは、ある時期に高台上より短時間のうちに押し出されたものと推定されるが、後述するSE5962を覆う埋土が石塔類を多く含む本層であることから、その時期は比較的新しいものと考えられる。

#### 【2調査区】

本調査区は、第118次発掘調査区の中で最も広い面積を有するものである。調査区全体が後世の改変を大きく受けており、遺構の残存状態は不良であった。

##### 1 遺構確認面

調査区西側において極めて小面積であるが確認した遺構確認面である。西側の屋敷とを画する石垣SV5908は本確認面の上に形成されている。

##### 2 遺構確認面

大きく削平を受けた遺構確認面であり、多数の柱穴および土壌を確認した。これらの中には、本来は1遺構確認面より掘り込まれている遺構が存在するものと想定されるが、1および2遺構面の帰属を識別することは困難な遺構が多い。

SS5860 調査区南端で確認された全面砂利敷の南北道路である。幅員は1.8mを測り、延長6.0mを検出した。本道路の南端は第113次発掘調査により確認されている八地谷川に沿う東西道路SS5090に接続する。北端については必ずしも明確ではないものの、道路延長上にSE5866が存在すること、および2遺構確認面中央部の遺構が希薄であることから、南端部付近で完結する道路である可能性が高いものと推定している。

SX5857 SS5860の砂利敷面直上に並ぶ一列であり、東端はSX5858に接続する。西端は一部欠落しているものの、SX5859に接続するものと想定される。

SX5858 SS5860の砂利面東側に並ぶ石列であり、途中欠失する部分が存在するものの延長5.2mを検出した。南端ではSX5857と接続する。

SX5859 SS5860の砂利面西側に並ぶ石列であり、延長2.7mを検出した。

SD5850 幅0.2mを測る南北溝であり、SD5853と対になる層数の区画溝と考えられる。流路は北から南へ流れ、八地谷川へ排水している。

SD5853 幅0.2mを測る南北溝であり、層数の区画溝である。流路は北から南へ流れるが、北端部で東方向へ屈曲するため、その延長線上に検出されたSE5851の排水を兼ねた溝であったものと考えられる。

SD5864 SS5860を横断する東西溝であり、幅0.2mを測る。流路は道路東側で南方向へ屈曲し、八地谷川へ排水される。

SE5851 直径1.1mを測る井戸であるが、安全上のため完掘はしていない。上部が削平を受けていたため天場石は存在せず、遺構周辺には井戸に使用していたと考えられる部材が散乱していた。

SE5866 直径0.9mを測る井戸であるが、安全確保のため完掘はしていないため、深さは不明である。天場石は削平を受けた状態で検出であった。

**素掘り井戸** SE5911 直径1.0m、深さ1.7mを測る井戸である。底部までを全掘したものの、側石を全く用いない素掘りの井戸である。本遺跡では石積井戸が通有であるのに対し、極めて異質な井戸である。

SB5904 SS5860際に建つ掘建柱建物で、間口6.8m、奥行9.2mを測る。本建物を構成する柱穴SK5874から良好な一括遺物が得られており、挿図2にその一部を報告する。

### 【3調査区】

本調査区は、2調査区より約0.8m低いレベルに位置し、第118次発掘調査では最も良好な遺構面を検出することができた。本調査区では大きく3時期の遺構面が確認されている。上層遺構面である1遺構面は、調査区内に点々と断片的に検出されたものであり、遺構を面的に捉えられていない。本調査区の主要遺構面である2・3遺構面は、1遺構面より0.2m前後下層に広がりを持つ遺構面であり、2遺構面と3遺構面のレベル差は数センチである。

SD5966 2調査区との境に位置する東西溝であり、幅0.2m、延長約8.0mを検出したものの、多くの側石を欠失しており全容は不明である。西端はSF5964と接している。

SD5991 本区画への進入路であるSS5994の西側側溝である。幅0.2～0.3mを測り、延長約5.0mを検出した。後述するSE5989の排水路も兼ねていたものと想定され、SD5992へ接続していたものと考えられる。

SD5992 SS6001の南側側溝であり、幅0.2mを測る。

SD5993 SS5994の東側側溝である。幅は0.2mを測り、最深部では深さ0.53mを測る。本溝は、後述する道路SS6002により埋められていることから、最終段階では廃絶されていたものと考えられる。

**大型礎石建物** SB5970 大型の礎石建物であるが、調査区域外に伸びているため規模は不明である。礎石の配列から南面に庇を持つものと想定される。2遺構確認面の建物である。

SB5971 柱間東西2間、南北2間の小型掘建柱建物であり、後述するSB5972と同じ3遺

構確認面に属する。

SB5972 柱間東西5間、南北3間を測る掘建柱建物であり、建物の軸方向は先に述べたSB5970と一致する。SB5970の下層建物である3遺構確認面の建物である。

SB5973 東西3.0m、南北3.0mを測る全面石敷の蔵である。南側両袖には礎石が対照的に検出されていることから、南側に入口を持つものと考えられる。

SE5962 直径1.0m、深さ2.6mを測る。遺構確認時には礎石は検出されず、土塊状の遺構として確認したが、掘下げをおこなったところ開石を検出した。開石は一部分のみが残存するにとどまり、依存状態は不良であった。本遺構は1調査区の石塔類を多く含む斜面厩上により覆われていた。

SE5989 直径1.0mを測る井戸であるが、安全上の理由から完掘はしていない。本遺構は2遺構確認面において検出したものの、依存状態が極めて悪く崩落の危険性が認められたため、井戸周囲と共に掘下げを継続したところ、確認面下約0.9mにおいて安定した石積面を確認することができた。

SF5964 2調査区との境で検出された方形石積遺構であり、東西1.1m、南北0.8mを測る。

SS5988 SB5970の南側に検出した砂利敷である。検出範囲は東西1.8m、南北1.0mと極めて限定された範囲であるが、直径0.1m前後の石を密に敷き詰めた状態であった。

SS5994 SS6001と接続する東西道路であり、幅員は2.7m前後を測る。道路西側にはSD5991、東側にはSD5993をそれぞれ側溝として持つ。また、路面には砂利は認められないが、石列SX5995が道路を横断するように配列されていた。本道路は比高差が大きく1.0mを測る。本道路直上には1遺構確認面に属する土壌が存在するため、最終段階には廃絶していたものと考えられる。

SX5995 SS5994中程に道路を横断する形で設置された石列である。石列上面と路面のレベルが一致することから、SS5994に伴う施設であることが推定される。

SS6001 東西道路であるが、現有道路と重複しているため幅員については不明である。延長は、第113次発掘調査において確認されたSS2952との交差点より、先に述べたSS5994との交差点を結ぶ16.5mである。南側にはSD5992を側溝として持つ。

SS6002 先に述べたSD5993を一部埋める形で作られた道路であるが、後世の削平が大きく一部のみを確認したに過ぎないが、全面砂利敷きの固く締まった路面を持つ。SS5994廃絶後おそらくは1遺構面の段階で作られた道路と推定される。

#### 【4 調査区】

本調査区は、屋敷の区画をそのまま水田区画に転用したため、区画全体の形態は良好に遺存しており、東西・南北ともに約16.0mを測る正方形の区画であることが把握されたが、遺構白体の削平は大きく進んでおり、屋敷内の建物配置等を把握するまでには至らなかった。

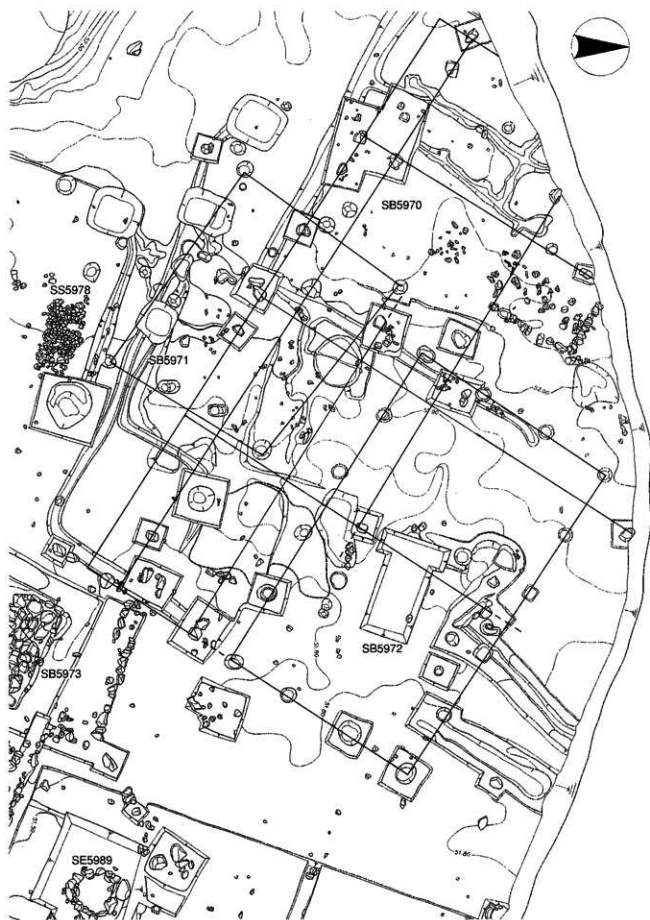
SD5996 本区西の南側区画溝であり、幅0.3mを測る。3調査区において検出したSD5966が接続するものと考えられる。

SF6000 東西0.7m、南北1.2mを測る方形石積遺構である。西側石の一部で高さ4石を確認した。位置的関係からSS6002敷設時に廃棄された遺構であると考えられる。

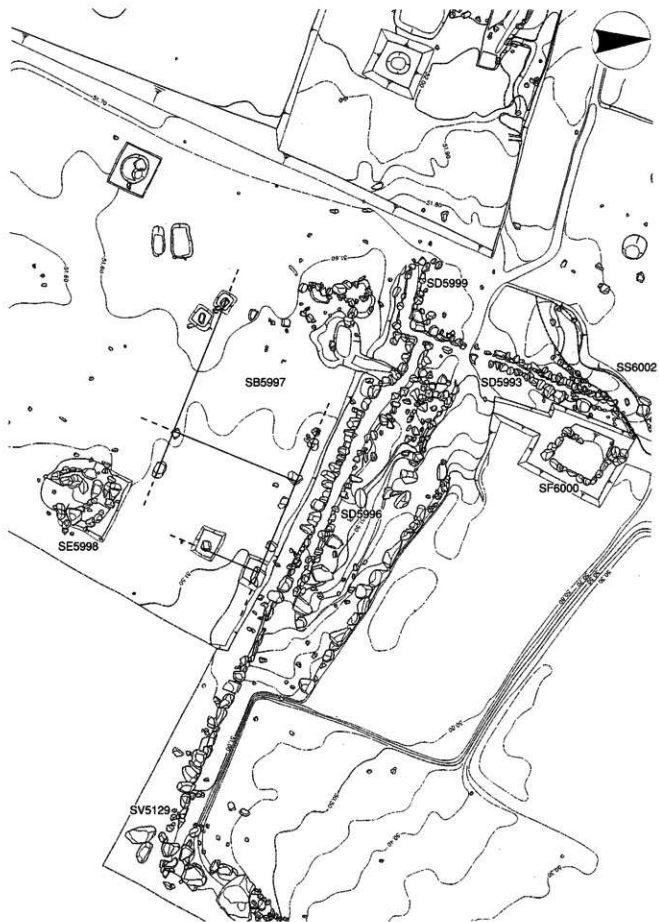
(水村伸行)



第4図 SD5850・5853・5864・5869、SE5851、SS5860詳細図 (S=1/100)



第5図 SB5970・5971・5972詳細図 (S=1/100)



第6図 SB5997、SD5996、SE5998、SF6000、SV5129詳細図 (S=1/100)

遺物 (第7~13図、PL.8~14)

第118次調査で出土した遺物の総数は、27,548点である。その内訳は表2に示すとおりである。以下に、調査区画および出土層位・遺構ごとにとまとめて主要遺物を紹介する。

器種	破片数	%	器種	破片数	%	器種	破片数	%			
前	土	5,370	青	碗	323	全	銅銭	40			
後	土	677	碗	120	碗	70	刺	1			
十	鉢	250	香炉	27	刺	1	刺	1			
部	漆器	957	鉢	25	小柄	8	刀	1			
貨	掛花牛	1	盤	9	キセル	2	刀	1			
	胡瓶	2	花瓶	1	刀装具	2	橋台	2			
	瓶	22	酒六司	6	鏡	1	鏡	1			
	漆器	1	その他	1	計	512	1.86	鏡	1		
	計	7,240	計	512	1.86	鏡	1	鏡	1		
	土	14,976	碗	33	碗	33	鏡	1			
	土器	41	皿	763	香炉	3	鏡	1			
	土器	4	杯	40	鉢	1	鏡	1			
	土器	4	鉢	40	鉢	1	鏡	1			
	土器	2	壺	4	鏡	1	鏡	1			
	土器	16	合子	1	鏡	1	鏡	1			
	その他	6	その他	3	鏡	1	鏡	1			
	計	15,049	計	845	3.07	鏡	1	鏡	1		
日	碗	159	碗	209	陶	碗	209	計	162	0.59	
本	皿	11	皿	387	皿	387	石土輪塔	89	石土輪塔	89	
製	瓶	1	杯	14	家	2	重石五輪塔	301	重石五輪塔	301	
陶	壺	58	水注	1	壺	1	宝印印塔	56	宝印印塔	56	
器	仏花瓶	3	壺	1	壺	1	瓶	29	瓶	29	
	鉢	4	壺	1	壺	1	小形口瓶	109	小形口瓶	109	
	その他	3	その他	4	計	618	2.24	瓶	17		
	計	239	計	618	2.24	計	618	2.24	瓶	29	
	青	8	青	3	青	3	壺	61	壺	61	
	青	157	青	1	青	1	壺	1	壺	1	
	皿	90	小形碗	1	小形碗	1	壺	56	壺	56	
	香炉	5	楊梅壺	31	楊梅壺	31	壺	25	壺	25	
	鉢	13	黒地碗	1	黒地碗	1	壺	41	壺	41	
	壺	14	菊文紅水注	1	菊文紅水注	1	壺	2	壺	2	
	脚皿	6	碗	8	碗	8	壺	1	壺	1	
	花瓶	2	壺	34	壺	34	壺	2	壺	2	
	水注	1	壺	4	壺	4	壺	13	壺	13	
	計	188	計	46	0.17	計	46	0.17	壺	1	
	香炉	8	小	2,050	7.46	小	2,050	7.46	壺	1	
瓦	火鉢	2	瓦	12	瓦	12	壺	55	壺	55	
	風炉	6	瓦	6	瓦	6	壺	20	壺	20	
	瓦	6	瓦	3	瓦	3	壺	236	壺	236	
	壺	3	壺	3	壺	3	壺	21	壺	21	
	花瓶	2	壺	2	壺	2	壺	144	壺	144	
	その他	17	計	50	0.18	計	50	0.18	計	1,309	4.75
	計	50	土師器	171	土師器	171	土師器	171	土師器	171	
	土師器	171	須臾器	522	須臾器	522	須臾器	522	須臾器	522	
	須臾器	522	埴輪	10	埴輪	10	埴輪	10	埴輪	10	
	埴輪	10	石室	34	石室	34	石室	34	石室	34	
	石室	34	埴輪	6	埴輪	6	埴輪	6	埴輪	6	
	埴輪	6	珠洲	4	珠洲	4	珠洲	4	珠洲	4	
	珠洲	4	瓦器・その他	293	瓦器・その他	293	瓦器・その他	293	瓦器・その他	293	
	瓦器・その他	293	計	1,040	3.78	計	1,040	3.78	計	1,040	3.78
小	計	23,814	小	23,814	86.46	小	23,814	86.46	小	23,814	86.46

表2 第118次発掘調査出土遺物一覧



## 【1調査区】

### 大量の石造物

調査区西端に位置する区画で、上面の平場を広げるように流し込んだ造成土が斜面に厚く堆積し、この埋土中から五輪塔を中心とする大量の石造物が出土した。また南側で検出した土壌内からは火葬骨とみられる小骨片が多く出土したが、副葬品と考えられる遺物は出土しなかった。

越前焼 1は口縁帯の名残がみられるⅡ群<sup>1)</sup>の大甕である。2は口縁がやや立ちあがった中甕、4は口縁部が肥厚したⅣ群の大甕である。3・5は壺。6はⅢ群bの播鉢で、10条1組の插目が深く入れられている。7はⅣ群の播鉢。8・9は口縁断面が丸みを帯びていることからⅢ群aの考えられる。10・11は口縁の内湾する鉢である。

土師質 土師質Ⅲは上段の平場の土壌内より多く出土した。12はB類<sup>2)</sup>でタール痕がみられる。13~15はC類でタール痕はみられない。16は直径14.5cmのD類で、器壁が薄い。

瀬戸美濃製品 17は釉薬が透明度のある褐色を呈する鉄軸碗である。18は直径15.0cmを測る灰釉平碗である。

中国製陶磁器 19は青磁酒会壺の蓋。20は直径35cmを超える青磁盤である。外面は無文で内面に刻花文が施される。21は見込みに十字花文、外面に牡丹唐草文が描かれたB群<sup>3)</sup>の染付皿である。

金属製品 22は刀装具の足金物で漆が塗られていた痕跡がみられる。

石製品 出土した石造物のうち銘文の判読できるものについては、石造物銘文一覧表として表3にまとめた。1調査区から出土した石造物は597点で、種類の内訳は「石五輪塔が89点、組合せ五輪塔が301点、宝篋印塔が56点、板碑が29点、分類不明の石塔類が109点、石籠が13点である。23~26は空位印塔で、それぞれ相輪、笠部、塔身、基礎の部分である。27~31は石五輪塔である。28・30・31は地輪に刻まれた法名から時衆の墓石と考えられる。また、29の法名にみられる「監寺」とは禅宗寺院の僧の役職名である。これらの石造物銘文からは諸宗派の法名が確認できるので、石造物は八地谷に所在した複数の寺院墓地から集合したものと考えられる。32は組合せ五輪塔の水輪部分である。33~35は板碑形の墓石に五輪塔を浮彫りにしたものである。なお、今回出土した石造物の銘文から年月日の判読できたものについては表4にまとめた。古いものとしては文安3年(1446)のものがあり、全体としては1490~1500年代に造立のピークがみられた。遺跡に露出している石造物については、これまでの銘文調査<sup>4)</sup>の結果、造立のピークは天文年間と考えられてきた。しかし、本調査区出土のものはむしろ天文年間ものが少ないという傾向がみられた。

### 時衆の墓石

1) 越前焼・播鉢の分類については、『京道頓江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』福井県立総合文化センター 1983年 参照

2) 土師質皿の分類については、『特別史跡 兼谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅰ 1979年、および『特別史跡 兼谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅳ 1999年 参照

3) 染付の分類については、小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982年 参照

4) 『兼谷石造物調査報告書』Ⅰ 1975年 参照

遺物番号	種 類	部 位	高さ	銘 文	西 暦	図版番号
3247	一石	地	22.5	文阿弥院ノ、京様ニ天正五日	1530	
5259	組合せ	地	18.5	斎修ノ妙善禪尼		
6907	一石	地	14.5	大水二年壬午、普一房、七月廿日	1522	
7707	組合せ	地	—	相伝ノ物故ノ		
7727	組合せ	地	—	ノ大徳		
7731	組合せ	地	18.9	松丸ノ、庵斎禪門、四月四日	1500	
7733	組合せ	地	19.5	文安ノ、道仲禪門、四月九日	1446	
7735	組合せ	地	20.8	ノノ禪門		
7736	組合せ	地	22.4	松三年ノ、忍江合勝庵定門、月廿六日	1494	
7737	組合せ	地	17	牌四ノ、松三年三月十一日		
7739	一石	火・水・地	48	天文九年、須阿弥院伝、七月廿五日	1540	30
7744	組合せ	地	24.5	長又三ノ	1489	
7745	組合せ	地	—	松三年ノ、金沙ノ、五月廿二日	1494	
7751	一石	光彩	50.5	ノ放妙蒙童女霊位		
7763	一石	火・水・地	42	明徳六年三月一日、道徳禪門・妙善禪尼、永正八年七月ノ	1499-1511	27
7778	一石	地	23.9	天文四年乙未歳、庵仲房、五月七日	1535	
7790	組合せ	地	21.3	文明十四年ノ	1482	
7791	宝位	—	—	長祿ノ		
7792	一石	地	21.5	享祿二年、妙善禪尼、六月廿六日	1529	
7797	一石	空・風	18	雨無		
8331	一石	水・地	27.7	永祿九年、來阿弥院伝、八月七日	1566	31
10702	一石	地	21	永禄十一年、閏、房、十一月十八日	1568	
10711	組合せ	地	18	參拜妙善禪尼、文明拾年卯月廿一日	1478	
10720	組合せ	地	17.8	月、阿弥院伝、十四日		
10737	一石	火・水・地	40.5	永正二年乙丑、道春禪門、正月十日	1505	
10740	一石	光彩	60.5	文明十九年、普一房、五月廿三日	1487	28
10741	一石	光彩	50.4	衆一房		
10750	一石	火・水・地	36	永禄九年、宣阿弥院伝、四月二日	1566	
10756	組合せ	地	25	監製ノ、真ノ		
10826	組合せ	地	18.5	明徳四年	1495	
10828	不明	地	—	禪定門ノ、二年癸丑十一月廿四日	1493	
10830	組合せ	地	—	十一月ノ		
10846	組合せ	地	—	妙琳童女、永正六年六月廿ノ	1509	
10847	組合せ	地	—	ノ、冬年ノ、ノ金ノ、月十九日		
10849	組合せ	地	—	妙ノ		
10850	組合せ	地	21.5	正仁二年、尊榮禪尼、四月二十六日	1468	
10856	宝位	瓦礫	22.5	淨修庵眞言人轉		26
10860	組合せ	地	21.5	康正三年、妙心禪尼、月二十六日	1457	
10863	一石	光彩	57	大水二年壬午、大處相兼監寺、三月廿一日	1522	29
10865	宝位	—	21.5	明徳八年己未、ノ仲貞景大徳、月廿九日	1499	
10866	不明	地	—	ノ陀佛		
10957	組合せ	地	19.3	宗薫禪尼、永正五年十二月十日	1508	
10962	組合せ	地	18	斎修智水大徳		
10963	組合せ	地	17.5	永正十一年申戌、妙善禪尼、十二月六日	1514	
10974	一石	火・水・地	42	元龜元年、長阿弥院伝、六月廿八日	1570	
10975	一石	火・水・地	48.5	ノ、閏七月四日		
10980	一石	火・水・地	42	文明十六年、物故妙林禪尼、七月廿八日	1484	
10984	組合せ	地	19.8	兼前禪門、文徳元年閏六月五日	1501	
10996	板碑	—	—	延徳二年、常華禪門、三月廿七日	1491	35
10998	板碑	—	—	ノ大徳ノ、四月		
10999	板碑	—	—	ノ邊修、永正四年丁卯七月四	1507	
11002	一石	地	17.5	享祿三年、眞妙禪尼、八月三日	1530	
11005	板碑	—	—	明ノ、性智大徳、六月廿日		34
11006	一石	火・水・地	44.5	妙心禪尼、永正十一年九月十日	1514	
11011	板碑	—	—	ノ邊修、永正丁卯七月日	1507	
11012	組合せ	水	13.5	ノ邊比丘尼、永正四年ノ	1507	
11052	組合せ	地	15	兼阿弥院伝		
11054	一石	火・水・地	48	永禄二年、妙善禪尼、九月廿五日	1559	
11079	組合せ	地	20	ノ、明徳六年丁巳	1497	
26603	組合せ	地	22	ノ、仙ノ、水ノ		
26610	一石	火・水・地	48	妙立大徳、大水七ノ年五月八日	1527	
26611	組合せ	地	21	ノ讀童女、ノ正六年七月八日		
26612	一石	光彩	66	大水二年、善阿弥院童子、十月廿三日	1522	
26613	一石	火・水・地	41	大水ノ、院阿弥院伝、月九日		
26623	一石	火・水・地	34	永正二年、妙善禪尼、三月二日	1505	
26624	一石	水・地	32	永正十六年、眞阿弥院伝、十月廿三日	1519	
26654	組合せ	地	19.8	ノ、ノ		
26688	組合せ	地	25	ノ、ノ光禪門、十一月十七日		
26689	組合せ	地	14.5	文明十九年ノ木、慶殿禪尼、月日	1487	
26690	一石	地	26	ノ、三月廿一日		

表3 第118次調査出土石造物銘文一覧

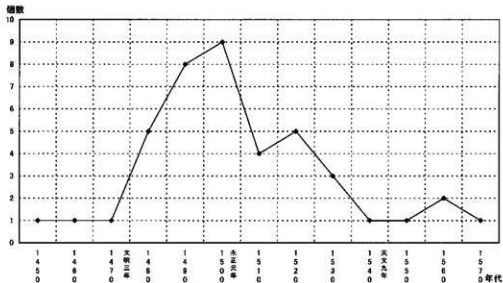


表4 第118次調査出土の石造物年代別個数

## 【2 調査区】

### 表土層・1遺構確認面

本調査区は後世に大きく削平を受けているため、1遺構確認面は一部しか残存していなかった。そのため、表土層と1遺構確認面はまとめて報告する。

越前焼 36はⅡ群の大甕である。37は口縁部の稜があまりはっきりしないⅢ群である。38は口縁部が完全には肥厚していないのでⅣ群aに分類される。40・41は口縁部が丸みを帯びているのでⅢ群aの播鉢である。39・42は小型で作りも粗雑なⅣ群の播鉢である。43・44は平鉢である。

土師質土器 45は口径6.6cmを測るC<sub>1</sub>類の皿である。46・47はC<sub>2</sub>類、48～50はD<sub>2</sub>類に分類される。51は口径34.3cmを測る大型の土師質皿である。胎上は白色で丁寧なナデ成形が確認される。このような30cmを超える大型の皿については出土数が少ないが、これまでも第35次調査<sup>5)</sup>等で出土している。

瀬戸美濃製品 52は口径11.6cmを測る鉄軸碗である。54は口径5.2cm、器高3.1cmを測る小型の鉄軸碗である。53は口径12.0cm、器高6.2cmを測る黄瀬戸碗である。55は灰釉の鉢で注口が作られる。

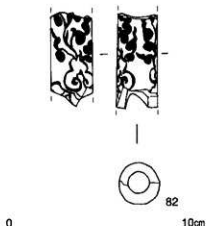
瓦質製品 56は口径22.8cmを測る瓦質風炉で、口縁部にはスタンプ文が施される。57も同じく瓦質風炉で、脚部が出土した。

中国製陶磁器 58・60・61は線描き蓮弁文の施された青磁碗である。59は外面口縁部に粗雑な雷文を線刻される。62は見込みに印花文の施された青磁碗で、釉薬は褐色がかつた色調を呈する。63は口径11.5cmを測る青磁椀花皿である。64は口径23.8cmを測る青磁椀花盤である。65は青磁香炉で、二次的に火を受けて釉薬は激しく火ぶくれをおこしている。

5) 『特別史跡一乗谷朝台氏遺跡発掘調査報告』Ⅱ 1999年 第19回 参照

る。66は小型の青磁香炉。155は算木文の青磁瓶。釉薬は淡青色の色調で、南宋青磁の優品である。このタイプの瓶は経筒形の花瓶として摩教館の伝書等にも描かれているので、戦国時代には高級な器物として所有されていたものと考えられる。67は青白磁の皿で紅皿等に使用されたものと考えられる。68～70は白磁皿である。71は八角形に面取りされた白磁坏で、高台内に黒書で「一」と書かれる。72は白磁壺である。釉薬はやや青みがかった灰色で、北宋時代の製品とみられるが、朝倉氏の時代に骨董的価値をもって珍重されていたものであろう。73は外面に芭蕉葉文を描いた染付碗である。74・75・77～79は鐘反の染付皿でB群に分類される。76は萼筒底タイプの染付皿である。80は底径10.6cmを測る染付皿で、見込みには蒹葭花文が描かれる。81は染付坏で、高台内には「大明年造」の銘を有する。82は釉裏紅の水注である。唐草模様が描かれている注口部分の破片が1点だけ出土した。・乗谷朝倉氏遺跡ではこれまでの発掘調査で160万点以上の遺物が出土しているが、釉裏紅が出土したのは第43次調査で鉢の破片が2例目の出土となる。注口部の文様が一致する同形の伝世資料に、出光美術館蔵の釉裏紅色煎水注がある。

白磁壺



釉裏紅水注

挿図1 釉裏紅水注実測図

## 2 遺構確認

**越前焼** 83は口径31.0cmを測る中甕である。肩の部分には凸帯がめぐる。84はⅢ群bの大甕である。播鉢については、85・87はⅣ群、86はⅢ群a、88はⅢ群bに分類される。

**土師質** 89はB類の皿。90～95はC類。96～98はD<sub>1</sub>類で、口縁部にタール痕を有する。99は口径12.8cm、器高2.4cmを測るD<sub>2</sub>類の皿である。100は口径14.0cmを測るD<sub>3</sub>類の皿で、器壁は薄めで丁寧なナデ調整がされている。

**瀬戸美濃製品** 101は口径9.8cmを測る鉄釉碗で、釉薬は鉛色に発色する。

**中国製陶磁器** 102は口径12.8cmを測る青磁碗である。内外面とも無文で胎土は堅緻。103は口径10.7cm、器高2.5cmを測る白磁皿である。104は染付碗で、見込みは蛇の目に釉薬が掻き取られている。二次的に火を受けたためか高台部の釉薬の縮みが激しい。105・107は外面に牡丹唐草、見込みに十字花文の描かれた鐘反皿である。106は口縁が内湾するC群の萼筒底皿で、見込みに捻花、外面に芭蕉葉文が描かれる。108は口径19.8cm、器高4.0cmを測る染付皿で、口縁は内湾する。

**金属製品** 109は銅製の紅皿である。

### 【3 調査区】

本地区は遺構の残存度が比較的良好であった地区である。

**越前焼** 110は口径7.2cmを測る小壺である。111・112はIV群の播鉢である。113はⅢ群bの播鉢。114は平鉢である。115は内面に小の窯印を有する鉢である。口径は31.6cmを測り、焼成良好。

**土師質** 116・117はB類の皿である。118～121はC類の皿。122は口径12.0cmを測るD類皿。123は口径30.3cm、器高4.4cmを測る大型の皿である。色調は白色を呈し焼成は良好で、丁寧な成形で、外面底部にかけては磨き調整痕がみられる。

**瀬戸美濃製品** 124は口径11.7cmを測る鉄軸碗である。125は口径10.9cm、2.8cmを測る灰軸皿である。126も同じく端反の灰軸皿。127は口縁部だけに灰軸のかかる卸皿である。

**中国製陶磁器** 128は無文の青磁碗である。129は底径16.8cmを測る青磁酒会壺で、外面には鎗蓮弁文が施される。130・131は外面に啓草文、見込みにアラバスク文の描かれた端反のB群染付皿である。132は染付水注の注口部分である。82の軸夾紅水注と同様の大きさのものと考えられる。

### 【SE5851】

2調査区で検出した井戸、SE5851内から出土した遺物をまとめる。

**越前焼** 133は口縁部が完全に肥厚したIV群の大甕である。134は口径10.2cm、器高14.0cmを測る壺である。口縁には片口が作られ、外面は肩部から底部にかけてタタキの痕がみられる。胎土は堅緻で灰黒色を呈し、焼成良好。135・136は播目が粗雑に入れられたIV群の播鉢である。137はⅢ群aの播鉢である。138は口径40.2cm、器高15.4cmを測るIV群の播鉢である。139は口縁の内湾する鉢で、口径11.5cm、器高6.7cmを測る。

**土師質** 140はB類の皿で内面には布目痕が残る。141はC類の皿で、口径9.0cmを測る。

**中国製陶磁器** 142は口径6.8cm、器高3.0cmを測る青磁皿である。

**石製品** 143は硯である。

### 【SE5866】

2調査区検出の井戸、SE5866内から出土した遺物をまとめる。

**越前焼** 144・145は口縁の立ち上がる越前焼壺である。146は内面に窯印を有する鉢。

**土師質** 147は土鉢である。

**備前焼製品** 148は口径4.2cmを測る備前焼瓶である。胎土は緻密で赤褐色を呈し、外面には軸葉は粟変し胡麻がみられる。底部は出土しなかったが花生などとして使用されたものと考えられる。

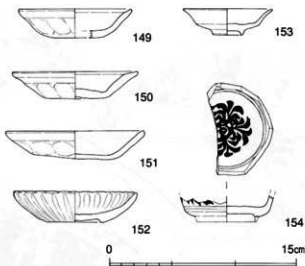
【SK5874】

SK5874は、2調査区で検出したSB5904を構成する柱穴である。柱穴内から出土した一括遺物  
括遺物を報告する。

土師質 149はC類の皿である。

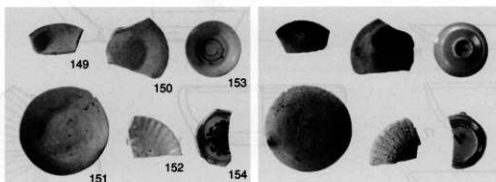
150は口径9.9cm、器高2.2cmを測るD<sub>1</sub>類皿である。151も同じく口径11.0cm、器高2.2cmを測るD<sub>1</sub>類皿で完形である。

中国製陶磁器 152は内外面ともに花弁状に彫刻の施された白磁菊皿である。153は口径7.0cm、器高2.1cmを測る完形の白磁杯である。見込みは蛇の目に釉薬が掻き取られている。154は見込みに花文の描かれる染付皿で、底部からの立ち上がりの角度が強く、筒状の器になるとも考えられる。

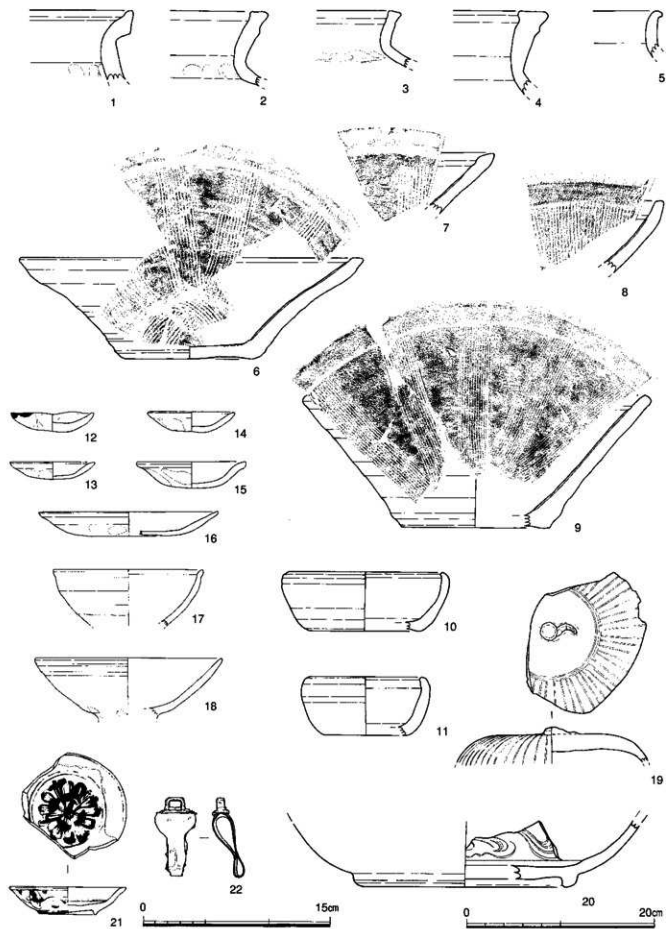


挿図2 SK5874 出土遺物実測図

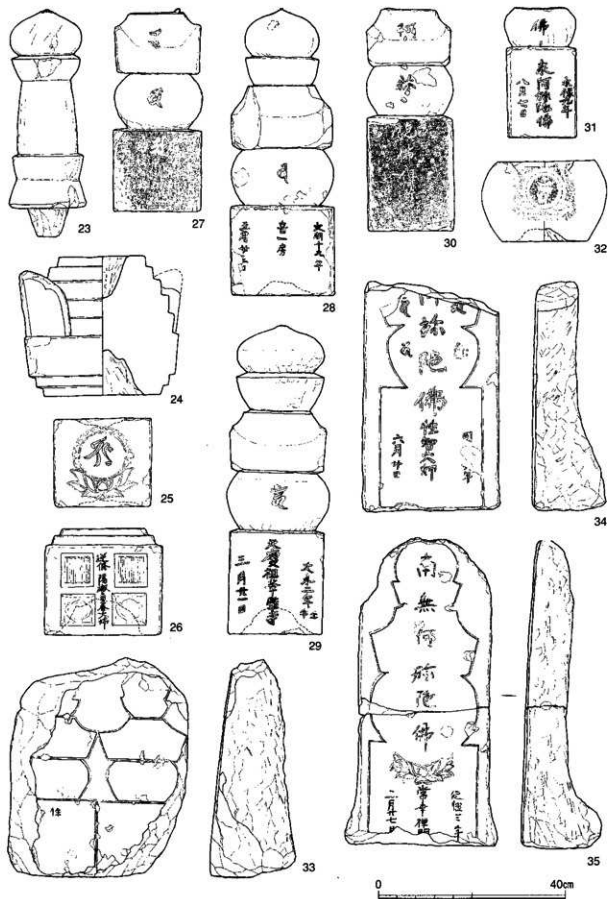
(宮永一美)



挿図3 SK5874 出土遺物写真

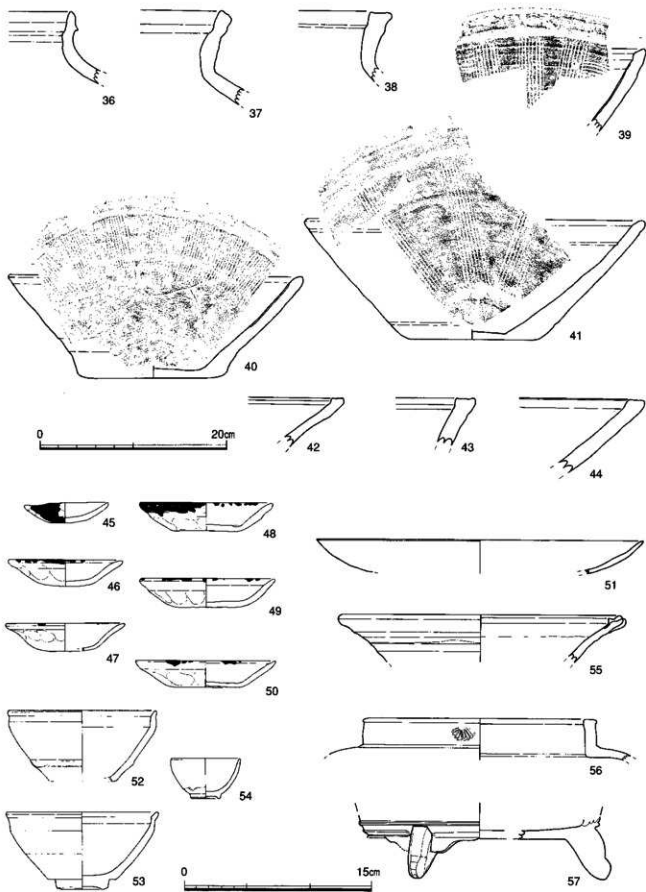


第7図 第118次調査出土遺物 (1)

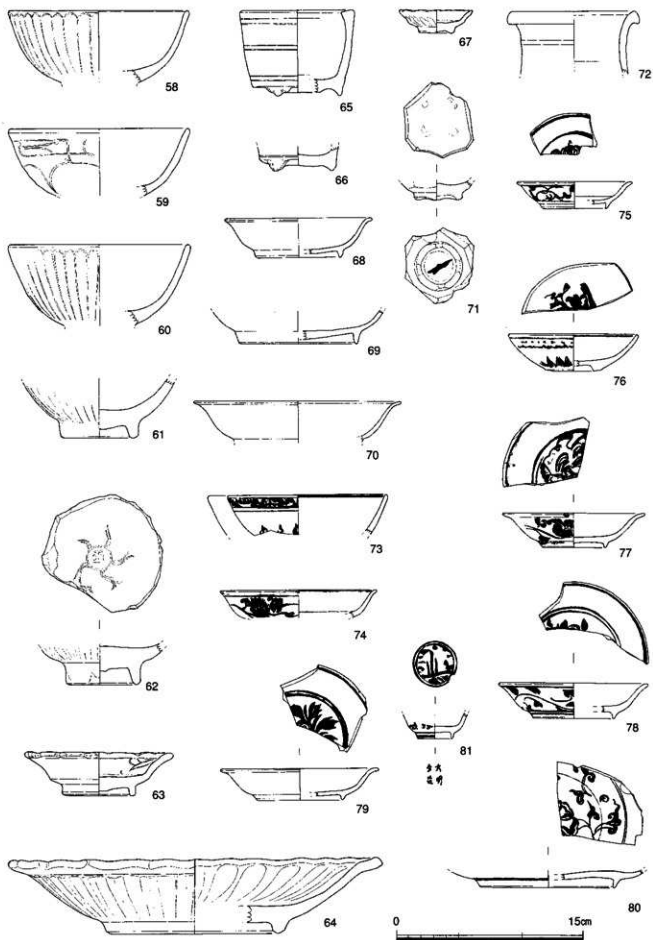


第8圖 第118次調査出土遺物(2)

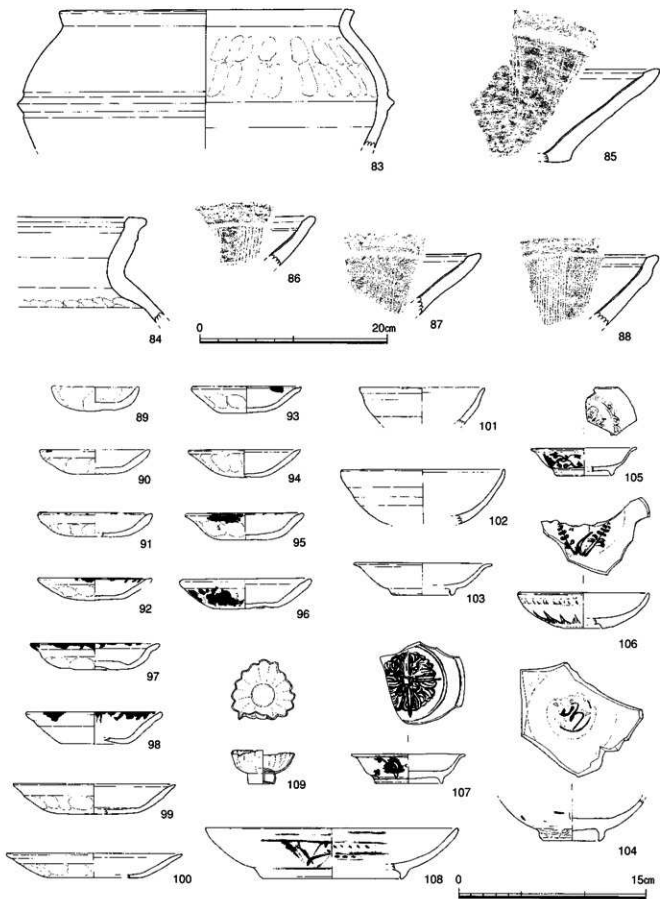




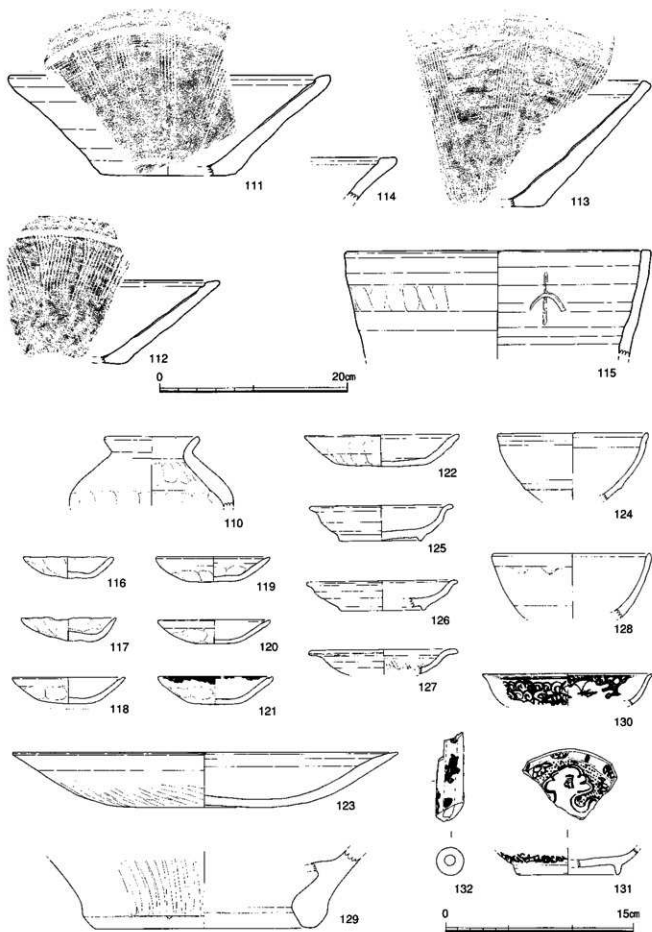
第9図 第118次調査出土遺物 (3)



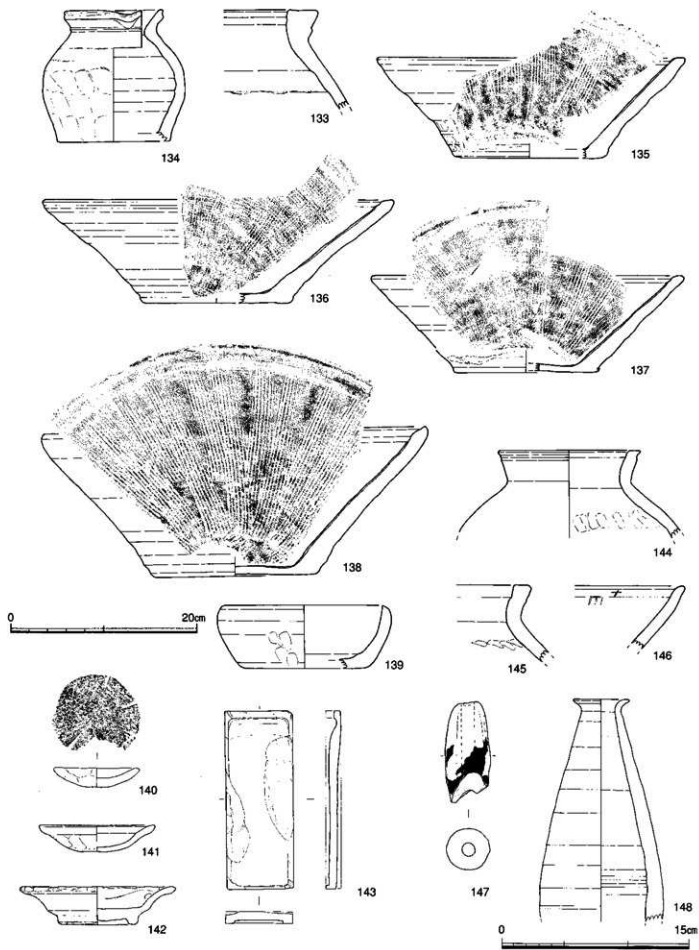
第10図 第118次調査出土遺物(4)



第11図 第118次調査出土遺物 (5)



第12図 第118次調査出土遺物 (6)



第13図 第118次調査出土遺物 (7)

### 3. 環境整備

#### 環境整備（一般）

「平成16年7月18日 福井豪雨」により、一乗谷朝倉氏遺跡の所在する一乗地区は甚大な被害を受けた。そのため、平成16年度は当初予定していた整備を、文化庁と協議の上で災害復旧を中心とした内容に変更した。平成17年度は、平成16年度に予定していた整備事業を実施した。

#### (1) 第109次調査区新御殿整備工事

平成12年度の第109次発掘調査区（新御殿地係）2,000㎡について整備工事を実施した。整備地区は義景館跡を囲む濠の南隣に位置する。この地区は後世の畑地の整備に伴い、遺構の残存状態が悪かったことから、朝倉館へと続く圓路脇の憩いの場として修景整備を行った。一乗谷川に沿って南北方向に道路が検出されており、その東側に道路と屋敷とを区画したとされる石垣が検出されている。

工事は、まず始めに、道路跡西脇に敷設されている南北方向の既存排水溝へ水が流入するように全体を整地した。整地には山堀、南濠側、そして旧県道の一部に残された後世の盛土を用いた。遺構検出面の上に山砂をかぶせ、さらに多いところでは山堀において厚さ50cm程、東南隅のトレンチ部分で厚さ40cm程の盛土をした。濠側にある既存木については、後世盛土を掘削する際に木の周辺を鉢状にして土を残した。さらに屋敷地の表面は芝張りで整えた。

また、道路が南北にわたり全面砂利敷で検出されたため、盛土をした上に砂利混ソイルセメント舗装（5cm厚）をした。砂利混ソイルセメント舗装は山砂0.15㎡当たり、セメント40kgに少量の水を加えて混合し、敷均しの過程で砂利0.15㎡を混入し、砂利が表面近くに位置するよう施工した。

道路表示

井戸は側石天端より160cm程の深さで検出されたが20cm程残して埋戻し、上面は水はけを考へて砂利敷5cm厚とした。側石は欠損部分を補充した。

井戸補修

石垣は倒れた石を起こすとともに、欠損箇所の補充をして整え、屋敷との境界を明示した。

石垣補修

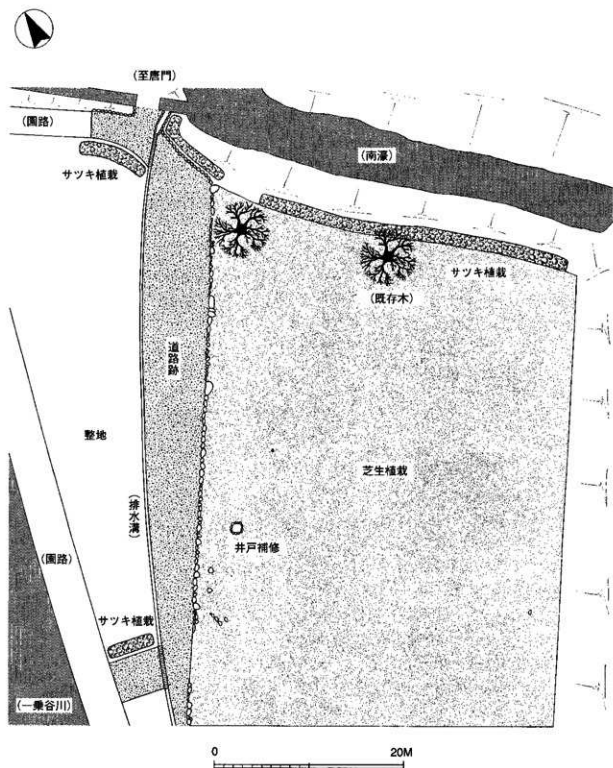
濠側にはサツキ（樹高0.3m、枝張0.4m）を列植した。転落防止を兼ねて奥行を150cmに植栽している。また、道路跡の西側にサツキを植栽した。

植栽

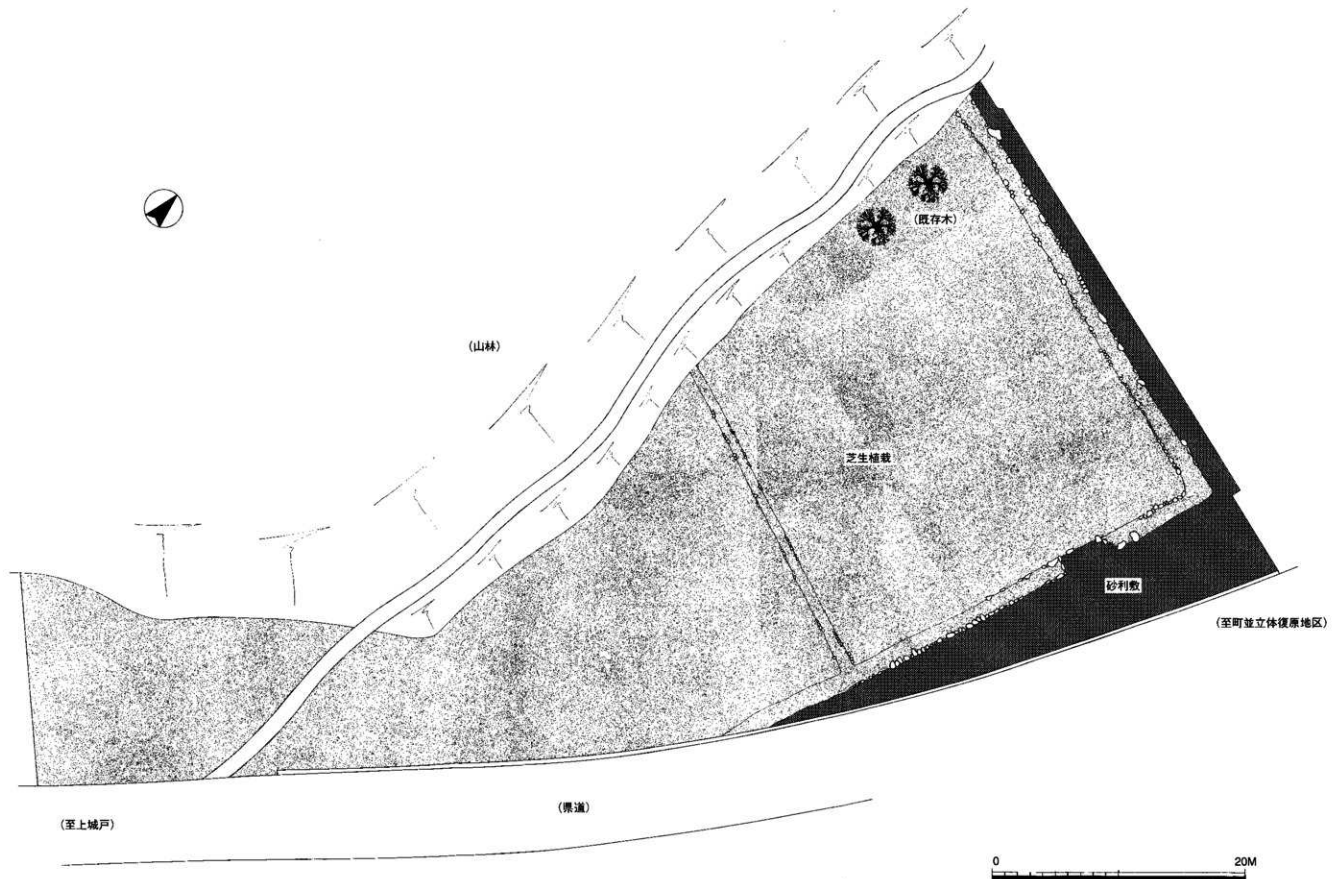
#### (2) 第100次調査区川合殿整備工事

平成9年度の第100次発掘調査区（川合殿地係）1,800㎡について整備工事を実施した。整備地区は、町並立体復原の南側に位置する。この地区は平成15年度に環境整備事業を行ったが、平成16年の福井豪雨で被災し、今回改めて整備をすることとなった。工事は前回の整備に準じた内容である。

**土壘復原** 対象地北側の敷地では屋敷地を取り囲むように土壘跡が検出されており、高さ20cm程の盛土をして復原した。南側は窪地となり大雨の際には湿地帯となることから、ここを埋戻し整地した。厚さは深いところで40cm程である。さらに全体を芝張りで整えた。北側の盛土より町並立体復原舗、及び泉道側は厚さ5cmの砂利敷とした。



第14図 第109次調査区新御殿整備全体図 (1/400)



第15図 第100次調査区川合殿整備全体図 (1/300)



## 環境整備（災害復旧）

平成16年の福井豪雨により、中心部を含む遺跡が被災した。平成17年秋にはこの遺跡を主会場の1つとする国民文化祭が予定されていたため、中心部の速やかな復旧が求められ、従来から継続的に実施してきた環境整備事業とは別に、今回の水害に対する復旧事業を実施した。復旧事業の2年目となる本年度は、以下の事業を実施した。

### (1) 朝倉館山裾法面等復旧整備工事

一乗谷朝倉氏遺跡の中心である朝倉館跡においては、背面となる東山裾斜面において幅30m・高さ8m・深さ2m程にわたる崩落が生じた。平成16年度は、災害復旧専門委員会を3回行い、検討・助言を得て実施設計を作成した。今年度は先述した国民文化祭が遺跡を会場にして開催されることから、それまでに工事を終えた。途中、災害復旧専門委員会委員の方々に個別に現場視察を依頼し、助言をいただいた。具体的な内容は以下の通りである。

まず、地山表面に浮いた土砂を取除き、崩落箇所周辺に生息する竹林の整備を行った。**崩落土砂除去**  
土砂除去後、盛土と地山とのなじみを良くするため、地山部分には高さ1m毎に50cm程度の段切をした上で、補強盛土工法を行った。ジオグリッドを1.5m間隔に敷設し、その間30cm毎に不織布を敷き、盛土転圧をした。さらに、盛土と地山の間に暗渠配水管を敷設し、蛇籠の上で外部へ排水できるようにした。一方、法面上部や現況とのすり付け部となる起終点など、盛土幅が狭く転圧機による機械施工が困難な箇所については、ヤシ土嚢を利用した。ヤシ土嚢に入れる土は後に周辺と同じ植物が生えることを期待して現地土を入れた。

崩落前の法尻と遺構面とは近接しており、復旧後も法尻が崩れず固定されていることは、遺構保存上必要不可欠であり、このため高さ50cmのフトン蛇籠を敷設した。圧迫感を極力軽減するため、高さを3段までに抑ええた。また材料は鋼製ではなく、ジオテキスタイル製として直線的な施工を回避し、山尻の曲線ラインにそって滑らかな仕上がりとした。**法尻固定**

当斜面に雨水が流入する範囲は1,370㎡であり、表面水の集中流下を防ぐため、斜面を2段階にわけ、小段にU字溝(300×300)を敷設した。南側には特別名勝庭園があり、これを守るためにこちら側への排水は避け、北側に出口を備える片側排水とした。北側より排出された水はヤシ土嚢による溝を流れ、山尻近くの遺構溝につながるようにした。**排水設備**

周辺環境との調和として、盛土部分の斜面に芝を張り、ポット苗を植えた。ポット苗は周辺に生息する在来植物にあわせ、ヒサカキ、アオキ、ヤマブキ、ヤブツバキを選んだ。また古くから觀賞用として愛でられ、雪に覆われる冬期には手間のかからないハギを多くし、花木であるウツギも植えた。さらに法尻の蛇籠の緑化は遺構保護のため低木植栽を避け、手前部分にキツタを植えた。**植栽**

(2) 朝倉館北濠復旧整備工事

**流入土砂除去** 今回の豪雨で東側斜面より土砂が流入し、朝倉館北側の濠の一部分を埋めた。工事はこの土砂を取除き、再度蹠などが流入するのを防ぐため、土留めの木柵を設けた。

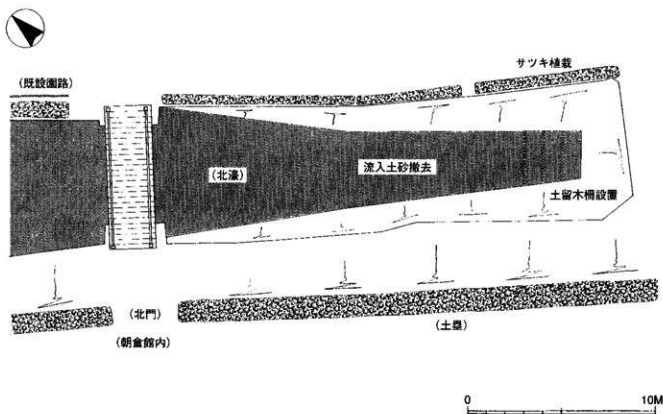
(3) 西山光照寺池復旧整備工事

**流入土砂除去** 今回の水害により、池の中に土砂が流入した。水面下は10~30cm程しか深さがなく、底にたまった土砂が見える状態となったため、流入した土砂を取除く工事を行った。

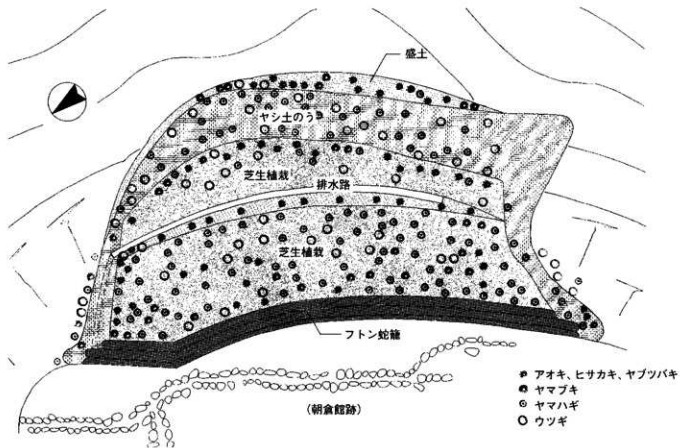
(4) 権殿地区復旧整備工事実施設計

権殿地区は平成12年度に環境整備工事を実施した。今回の豪雨で権殿地区一帯は全体にわたって土砂が流入し、人力で一時的に堆積土砂は取除いた。しかし、地面には不陸が生じて埋設した暗渠がつまり、大雨の際は周辺の畑などにも水が流入するなどの被害が生じている。そこで、この地域を全面的に復旧整備することとし、平成17年度は実施設計を委託した。

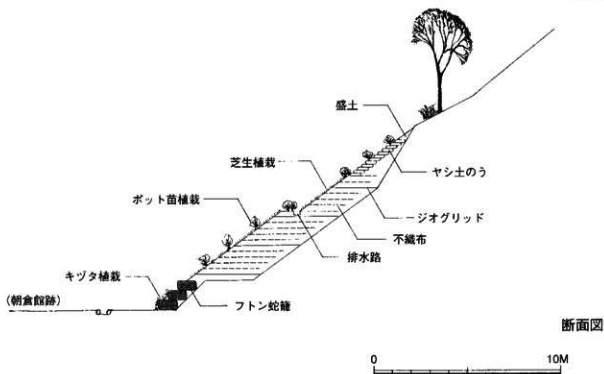
(千木良礼子)



第16図 朝倉館北濠復旧整備図 (1/200)



平面図



断面図

第17図 朝倉館山裾法面等復旧整備図 (1/200)



調査区南側全景 (北から)



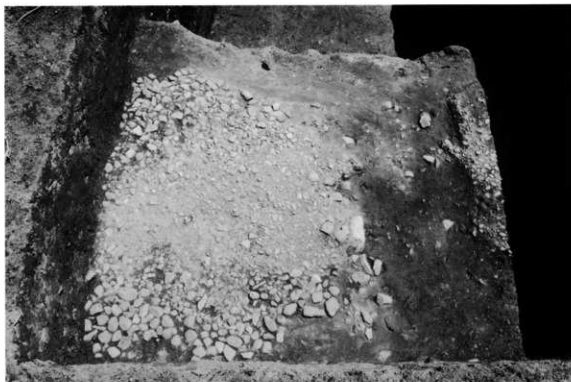
調査区南側全景 (東から)



SV5908近景 (北から)



SV5907 (手前) とSV5908 (奥) (南から)



SS5909近景 (西から)



トレンチ近景 (東から)



SD5864、5869、SX5899、SS5869近景(西から)



SD5993・5996、SB5997近景(南から)



土塚墓群近景 (北から)



SV5129近景 (東から)



SD5993・5996・5999近景 (南から)



SS5994近景 (北から)





SF5964近景(北から)



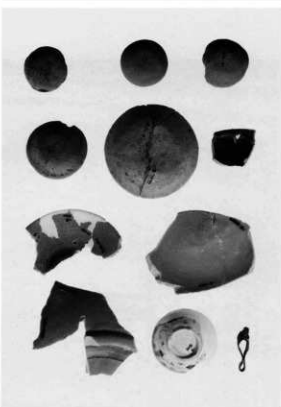
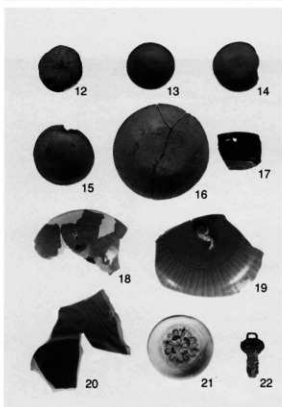
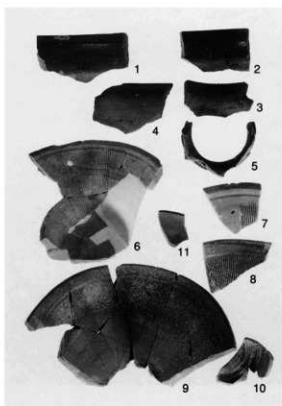
SS5988近景(北から)



SB5970・5971・5972近景 (北から)



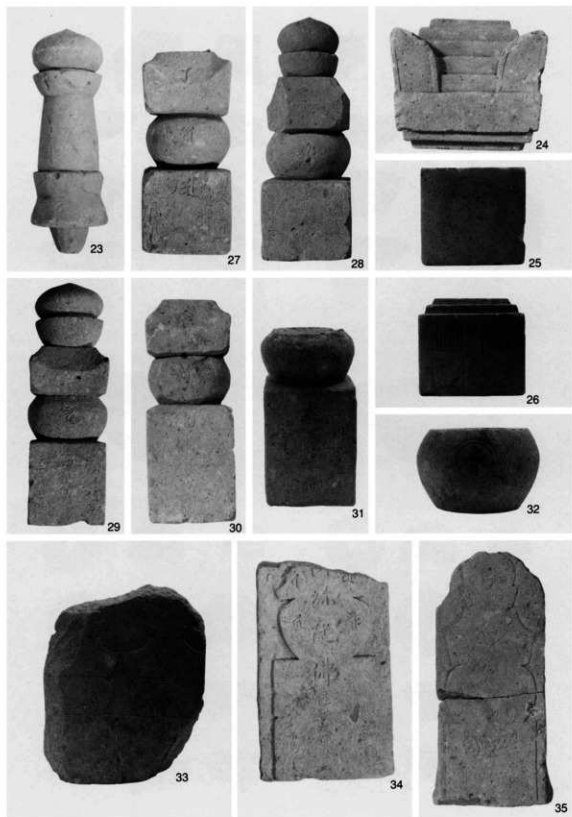
SB5973、SX5983近景 (北から)



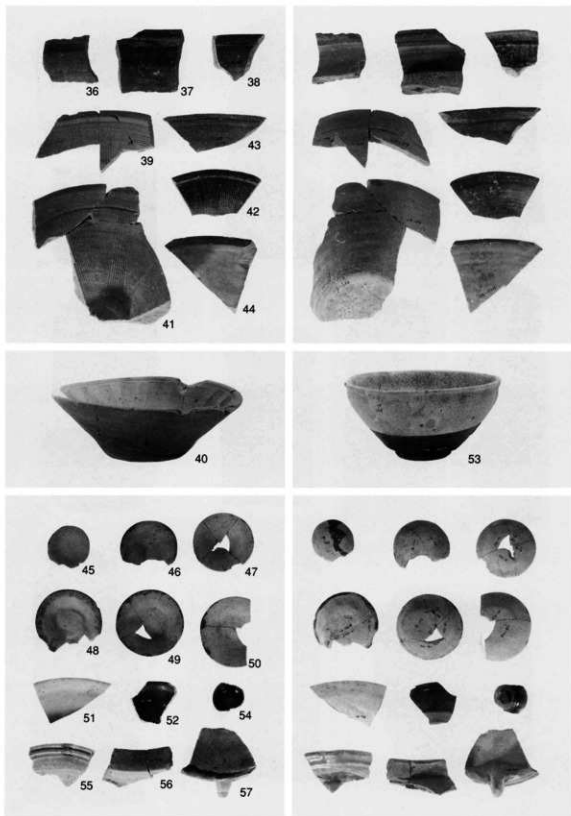
越前焼 甕 1・2・4 壺 3・5 播鉢 6~9 鉢 10・11 土師質 皿 12~16

鉄釉 碗 17 灰釉 碗 18 青磁 酒会壺 19 盤 20 染付 皿 21

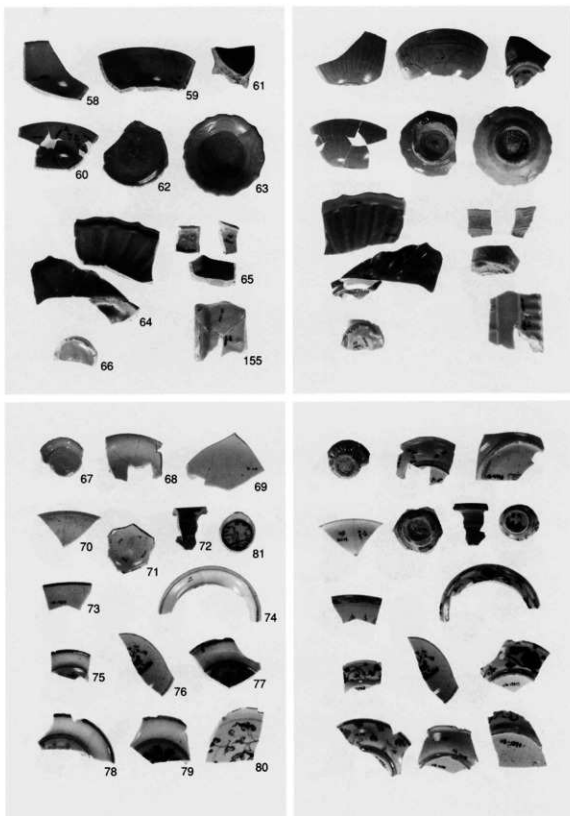
金屬製品 刀装具 22



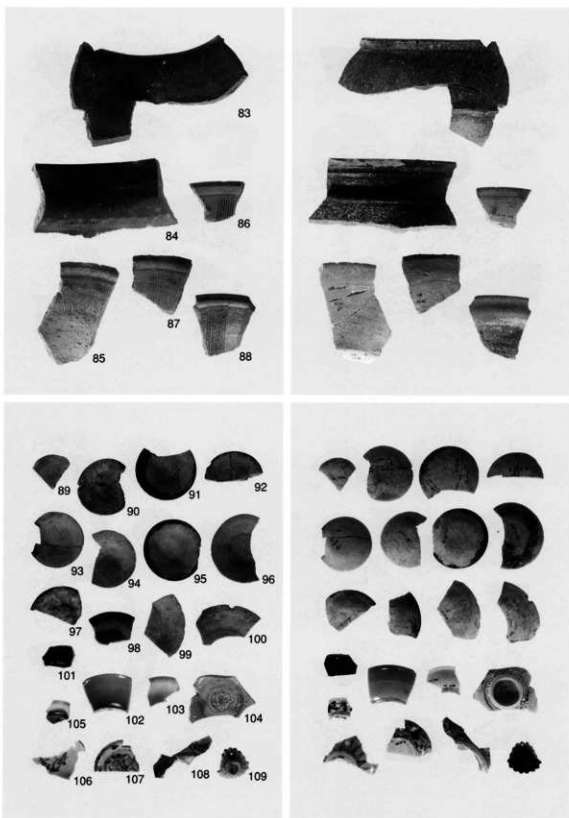
石製品 石塔 23~35



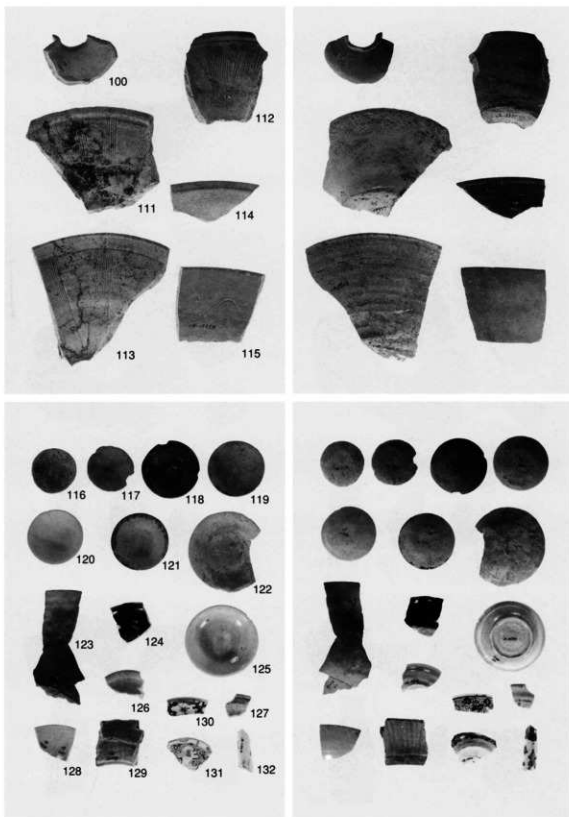
越前焼 甕 36~38 播鉢 39~42 鉢 43・44 土師質 皿 45~51  
 鉄釉 碗 52・54 黄瀬戸 碗 53 灰釉 鉢 55 瓦質 風埴 56・57



青磁碗 58~62 皿 63 盤 64 香炉 65・66 瓶 155 青白磁皿 67  
 白磁皿 68~70 坏 71 壺 72 染付碗 73 皿 74~80 坏 81

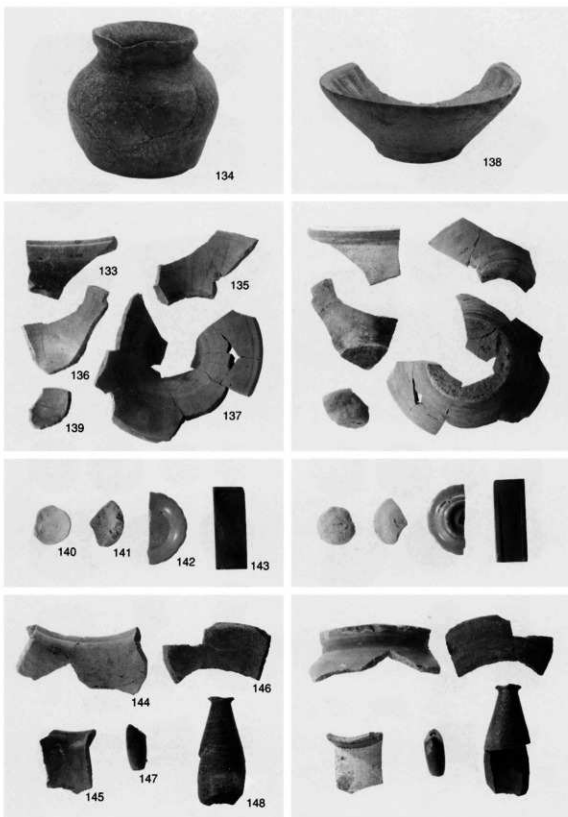


越前焼 甕 83・84 摺鉢 85~88 土師黄 皿 89~100 鉄釉 碗 101  
 青磁 碗 102 白磁 皿 103 染付 碗 104 皿 105~108 金属製品 紅皿 109



越前焼壺 110 搦鉢 111~113 鉢 114・115 土師質皿 116~123  
 鉄釉碗 124 灰釉皿 125・126 鈿皿 127 青磁碗 128 酒会壺 129  
 染付皿 130・131 水注 132





越前焼 甕 133 壺 134・144・145 掃鉢 135~138 鉢 139・146

土師質 皿 140・141 土錘 147 備前焼 瓶 148 青磁 皿 142 石製品 硯 143



第109次調査区新御殿整備工（南から）



第100次調査区川合殿整備工（北から）



朝倉館山裾法面等復旧整備工全景（西から）



朝倉館山裾法面等復旧整備工（小段南から）



朝倉館北溪復旧整備工（南東から）



西山光照寺池復旧整備工（南西から）

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしせき
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡36
副書名	平成17年度発掘調査・環境整備事業概報
シリーズ番	36
編集者名	宮永 一英
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152 福井県福井市安波賀町4-10 TEL.0776-41-2301
発行年月日	平成18年3月31日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
第118次調査	福井市城戸ノ内町 宇雲正寺	18210	史-31	35° 59' 55"	136° 17' 48"	050401 ～ 060331	3,000㎡	環境整備に伴う発掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
第118次調査	武家 屋敷 町屋	室町戦国時代 (15-16世紀)	道路3、井戸6、 石敷建物1、溜井3、 礎石建物1、 掘立柱建物3	越前焼、十師買里、 瀬戸・美濃焼、白磁、 青磁、染付、釉裏紅	石敷建物跡および掘 立柱建物群

特別史跡

# 一乘谷朝倉氏遺跡36

平成17年度発掘調査・環境整備事業概報

発行年月日 平成18年3月31日

編集・発行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館©

印刷 白崎印刷株式会社